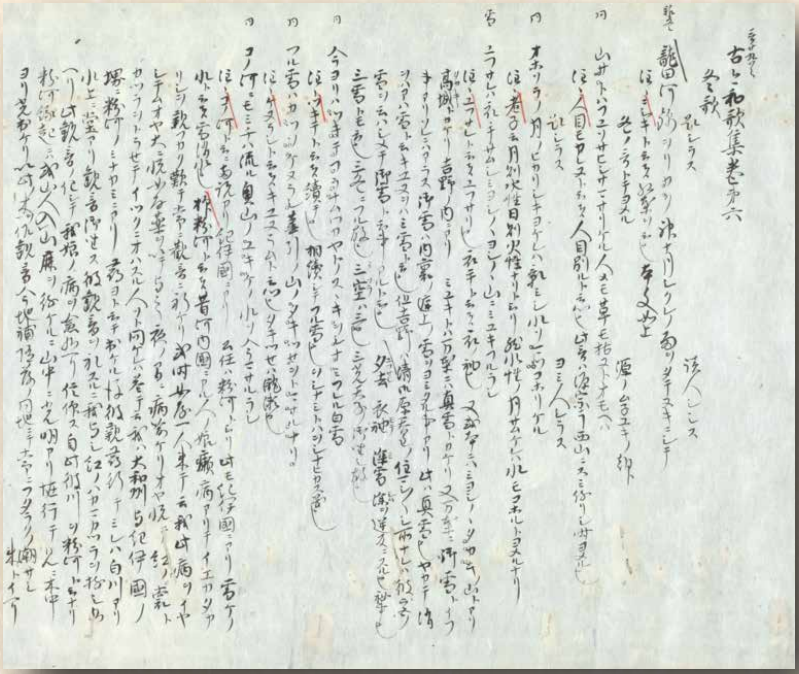
ISSN-1883-1931

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニューズ

No.42
WINTER 2016



『毘沙門堂本古今集注』

目　次

メッセージ

異分野間の共同研究と国際ネットワーク構築への夢 …… 上野　健爾　1

研究ノート

東日本大震災で被災した医学書と近世在村医 …… 西村慎太郎　2
　－福島県双葉町泉田家文書の世界－

『毘沙門堂本古今集注』の書誌的問題 …… 落合　博志　4

シーボルト本『北斎写真画譜』の行方 …… 鈴木　淳　6

トピックス

マレガ・プロジェクト シンポジウムinバチカン「キリシタンの跡をたどる」 … 三野　行徳　8

特別展示「韓国古版画博物館名品展」と国際ワークショップ
　「東アジアの絵入刊本」…… 入口　敦志　9

平成27年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会 …… 田中　大士　10

第39回国際日本文学研究集会 …… 陳　捷　11

大学共同利用機関シンポジウム２０１５
　「研究者に会いに行こう！　―大学共同利用機関博覧会―」参加記 …… 青田　寿美　12

ようこそ国文研へ …… 神作　研一　12

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 …… 14

異分野間の共同研究と国際ネットワーク構築への夢

上野　健爾（四日市大学関孝和数学研究所所長，国文学研究資料館運営委員）

小学校時代、熊本の祖父の家に出かけたときは、薄暗い蔵の中を探検するのが楽しみであった。古い器具が散乱し、今にもお化けが出そうな蔵の中は探検というのがふさわしい場所であった。蔵の主のアオダイショウの巨大な抜け殻を見付けて驚いた記憶が何度もある。父の転勤の関係で高校時代は熊本の祖父の家から高校に通っていた。そのころは蔵にも電気が引かれ、蔵の主もいなくなっていたので、勉強部屋を蔵の二階に移した。毎日、蔵に出入りするようなると、蔵のあちこちに無造作に置かれている文書類が気にかかってきた。そのなかに、明治の発行年月日が記された、言文一致体の短編小説や随筆類を載せた手書きの同人誌があった。言文一致運動は東京を中心に専門の作家の間で行われていたとばかり思っていた当時の私には、東京からはるかに離れた九州でも、運動が拡がっていたことに衝撃を受けた。そのときはそれ以上に興味を持つことはなく、同人誌について祖父に聞くこともなかった。一読して、小説としてそれほど意味のあるものでなかったことも一因ではあったが。その後、蔵は壊されてしまい、同人誌は行方不明になってしまった。

この同人誌のように、それ自身はたいした価値はなくても、別の角度から見ると思いもかけない意味を持つ文書類は少なくない。そうしたものは、個人的に保護されない限りは、いつか消えてしまう。幸い、現在は Web 上に資料の画像ファイルを残すことが可能な時代になっている。こうした資料が消滅してしまわないうちに、Web 上に保存して見ることのできる環境を構築したいものである。そのためには、画像資料保存のための大まかな指針を作って協力を呼びかける必要がある。

ところで私の専門と関係が深い江戸時代の数学、和算に関しては全国におびただしい数の資料が残されている。その大半は写本であるが、他の分野と異なる所は算額と呼ばれる絵馬の存在である。全国の神社仏閣に算額を掲げることが江戸時代後期に流行し、現在でも三百点ほどが残されている。算額には、漢文で数学の問題と答えと簡単な記法が記されていて、さらに問題に関係する彩色された絵がついている。残された算額の絵は、長い年月を経て退色してしまっている。しかし、コンピュータ上では昔の色彩に復元することが可能である。顔料や墨の情報がわかれば復元はさらに容易になるであろう。

また、和算の専門書の多くは漢文で書かれている。その多くに、訓点が施されているが、同じ書物であっても、時代と地域によって、訓点は微妙に違っている。数学の内容を理解することなく、和習の漢文を読むのは難しいが、和算の専門家と協力すれば簡単に読めるようになる。残念なことに和算独特の用語は漢和辞典にはほとんど採られていない。また、中国古典数学の伝統的な用語に関しては、諸橋の大漢和辞典でも用例の取り方はきわめて不完全である。しかし、異なる分野の研究者の間のネットワークが構築されれば、こうした問題は自然と解消されることと思われる。

同じ数学書の訓点を比較することは、江戸時代の人たちが、漢文をどのように読み書きしていたかを知る上で貴重な資料を提供してくれる。そのためには同じ数学書の写本を網羅して比較することが必要となってくるが、Web の活用はこうした研究を可能にしてくれるようになった。また、これらの写本は、筆写された年代が記されていない場合が多い。その年代の確定は難しい問題であるが、状況証拠だけでなく、使われた紙、墨などの情報を活用することが考えられる。現在の科学技術を使えば、産地や製造年による紙、顔料、墨の微妙な違いなどの詳しい情報を、現物を破壊することなく分析できる技術を確立することは可能であると思われる。こうした科学技術の活用は、異分野の研究者の交流によって初めて可能になる。

そうした技術を確立する手始めとして、寛永 4 年に初版が発行された『塵劫記』の総合的な研究を提唱したい。『塵劫記』は角倉一族の吉田光由によって著されたが、優れた内容のために多くの海賊版が出まわった。吉田光由は何度も改訂版を作ってそれに対抗した。吉田の押印や光由の花押を記した『塵劫記』が残されている。それを基に、海賊版との区別を非破壊的な方法で行うことは可能であろう。また『塵劫記』の一部の版はカラー印刷が施されている。その色彩の復元、印刷法の研究も大変興味あることである。『塵劫記』は美しい挿絵がたくさんあり、美術関係にも大きな影響を与えたと聞いている。残念なことに、数学書と言うことで、書誌学的な研究はほとんどされていない。2027 年は『塵劫記』出版 400 年の記念すべき年であり、それに向けて共同研究を行うことは意義深いことと思われる。

ところで、江戸末期の和算家の一部はオランダ語を勉強して、オランダ語の数学者を読んでいたことが知られている。彼らが読んだオランダ語の数学書の一部は日本学士院に和算書と共に保存されている。医学のみならず、暦学、天文学でも江戸時代後期にはオランダ語の専門書が重要な役割を果たしている。オランダで失われた本が日本に残されていることも考えられる。江戸時代末期、オランダを介したヨーロッパの科学技術の摂取は意外なほど広く行われていたようである。こうしたことを考えると、日本語の歴史的典籍の国際共同研究は思いもかけない新しい知見をもたらしてくれることが期待される。

東日本大震災で被災した医学書と近世在村医

－福島県双葉町泉田家文書の世界－

西村　慎太郎（国文学研究資料館准教授）

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災によって被害を受けた福島第一原子力発電所は、翌 12 日午後 3 時 26 分に 1 号機が水素爆発を起こし、次々と建屋が損壊、いまだに「アンダーコントロール」でない状況が続いている。この福島第一原子力発電所事故という国家権力の愚策によって招いた人災で、多くの人びとは今なお避難生活を強いられ、地域社会の紐帯は危機に瀕し、地域歴史遺産が大きな損害を被った。そのうち福島県双葉郡双葉町両竹（もろたけ）地区泉田家の歴史遺産は所蔵者と茨城史料ネットの努力によって救い出された。本稿は泉田家の歴史遺産を保全する活動に触れつつ、同家文書資料の特質を明らかにした上で、近世在村医の存在形態の一端を明らかにするものである（なお、双葉町の被害状況・現状については『双葉町復興まちづくり長期ビジョン中間報告』（双葉町復興推進委員会、2014 年）、『双葉町津波被災地域復旧・復興事業計画（両竹･浜野地区復興計画）』（双葉町、2015 年）、『平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）について』第 151 報（消防庁災害対策本部、2015 年 3 月 9 日午後 2 時発表）参照）。

福島県双葉郡双葉町は太平洋側に面したいわゆる浜通り地域であり、泉田家は同町両竹地区に住していた。泉田家が所蔵していた歴史資料の保全に関しては泉田邦彦氏による「警戒区域における「地域の記憶」継承への取り組み　－双葉町泉田家を事例に－」（阿部浩一・福島大学うつくしまふくしま未来支援センター編『ふくしま再生と歴史・文化遺産』山川出版社、2013 年）に詳しい。泉田家の歴史資料は 2011 年 8 月から断続的に保管可能な場所へ搬送し、茨城史料ネットでの保全作業が進められた。それらの歴史資料のうち文書資料については人間文化研究機構連携研究「大震災後における文書資料の保全と活用に関する研究」（2012 年度～ 2014 年度。研究代表者：西村慎太郎）においてデータ化を行ない、劣化が著しいものは NPO 法人歴史資料継承機構を介して現在でも新宿区の東洋美術学校保存修復科での修復を行なっている。

次に泉田家を概観してみたい。泉田家は陸奥国標葉（しねは）郡周辺を支配した桓武平氏標葉氏一族という由緒を有した家である。本稿で検討する泉田家は相馬藩在郷給人（村々に居住した藩士）の荒木源左衛門が泉田家と縁戚関係にあったことから、その三男･伯隆昭成が泉田姓を名乗ったことに端を発する。伯隆昭成は相馬藩典医・木幡伯栄に学び、文化 15 年（1818）相馬藩「御番医格」となっている。「御番医格」とは、藩が任命して在村医療行為を行ないつつ、藩に対して役負担を行なう医師のことである（「御番医格」については、田中照禾「番医格山田玄瑞の任務と医業」（一）（二）（『相馬郷土』24・25、2009 年･2010 年）参照。同論文は泉田邦彦氏の御教示による）。2 代目は伯隆昭成の息子・伯隆修成である。かれは 16 歳で木幡伯周公隆（伯栄養子）に、その後、仙台藩医･千葉明渓（のちに相馬藩医学館学頭）に学び､京都へ遊学している。彼も｢御番医格」として医療活動を行なった。その後、代々医業を生業のひとつとし、明治維新を迎えた。近代以降は醤油などの醸造・販売業、村会議員などを務め、地域の政治・経済・文化に大きな役割を果たした。

では、泉田家文書の特質を述べてみよう。整理済みの泉田家文書は 900 レコードであり、最終的には 1000 点程度の分量になるものと思われる。現状での泉田家文書の構造は泉田家の「家」文書が最も多く 712 レコードである（79.1%）。次に多いのは、村会議員として文書であり 85 レコード（9.4%）、諏訪神社総代としての文書 63 レコード（7.0%）と続いている。

では、圧倒的な量である「家」文書の構造を分析すると①泉田家商業経営 124 点（17.4%）、②文芸 121 点（17.0%）、③医療 82 点（11.5%）であることがうかがえる。特に商業経営関係の文書は明治 25 年（1892）～大正 15 年（1926）にかけての味噌・醤油製造販売業の経営帳簿がまとまって遺されており、近代福島県標葉地域の味噌・醤油製造販売を追求する上で欠くことのできない経営資料群と位置づけられる。

次に相馬藩在村医としての泉田家にスポットを当ててみたい。そもそも近世在村医研究は身分論・文化史の中で論じられており、18 世紀後半以降、医者間交流･投薬治療への関与･

泉田昭成像（初代・伯隆。泉田家蔵）

漢薬輸入増による利用によって、遍歴祈祷師の医療行為との区別が生じ、修行来歴（師匠・修行場所・「医道読書」）を提示して村方へ転入・定住していった。在村医の定着には村役人など中間層の存在が大きく、恩恵的医療・地域内の流行病対策・子弟の医師輩出という中間層のメリットが明らかにされている。

初代・泉田伯隆昭成は文政８年（1825）に御救金20両を藩に上納したことによって給人格１石を知行することとなった。その史料は次のようなものである。

荒木伯隆

病用出精仕、殊当違作ニ付、南標葉郷極難渋之百姓御手宛之端ニも仕度由ニ而、貯置候金子弐拾両上納仕、奇特之至候、依之為御褒美永荒山野之内より高壱石御知行被成下、郷士被召立、代々給人格被仰付候也、

文政八年酉十一月

相馬藩より与えられた土地が「永荒山野」であったためであろう、その後独自に知行地開発を行なっている。次に２代目泉田伯隆修成が記した「遺書」を見てみたい（泉田家蔵「過去帳」）。

一、当家ハ医業ヲ以開基ノ事ナレハ、小技ト云ヘトモ捨ヘカラス、身ニ病有トキハ忠モ孝モ如何トモスヘカラス、先第一身ニ病ナカラシムル様ニ慎ムヘシ、其余ヲ人ニ施シテ病民ヲ救フヘシ、此後ノ嗣子ハ眼科専門ニスヘシ、次に瘍科也、但シ学才ノ無モノハ内科ハ難シ、玄ナカラ其人ノ志厚トキハ、仮令学才無トモ医事小言・瘍科秘録・眼科錦嚢サヘ熟読スルトキハ先ツ可也ニテ、大ナル過チナカルヘシ、

古人云、道ヲ学ハ志也、医ヲ為ハ業也、業ヲ以志ヲ舎ズ、志ヲ以業ヲ廃セズ、

この「遺書」では子孫に対して眼科を目指すこと、そうでなければ瘍科（ようか）（疱瘡など皮膚の腫瘍などに関するもの）を目指すことを求めた。その際、次の三つの書物さえ読めば、生業にできると述べている。①「医事小言」。原南陽（水戸藩医）による医論・治方書。医学総論・診察方法・病症別治療法を記し、古方・後世方・鍼灸方の治療を掲載した書物である。②「瘍科秘録」。本間棗軒（漢方を原南陽に学んだ後、長崎でシーボルトに師事し、江戸で開業。全身麻酔による外科手術を行なう。水戸藩医となり弘道館医学館教授就任）による外科・皮膚科の治方書で、瘍科の医論と治療法を記した当時の最新の技術を提示した書物である。③「眼科錦嚢」。本庄俊篤（長崎で蘭方を学びシーボルトが治療できなかった眼病患者を治し、蘭漢折衷の眼科医として本庄宿にて開業）による眼科の医論・治方書。和漢蘭の眼病とその治療を記した書物である。

伯隆修成が記した「遺書」は眼科・瘍科といった最新医療行為の医師になることを求めていると同時に、医書の「熟読」によって医師になることが可能であると述べる。泉田家に医書が蓄積されて、遺された要因と考えてよかろう。但し、上記書物は泉田家文書の中で確認できない。

では、泉田家文書内の医学書の特質は何か。専門分野を問わず多様な蔵書群であるが、残念ながら虫損による劣化が甚大であるため、現在でも既述の通り東洋美術学校による修復が行われている。眼科書としては「弘済館蔵方眼科薬剤」・「眼科新書」（文化13年。和訳された最初の眼科書）があり、２代目伯隆の蔵書と目される墨書がある「傷寒論正義」・「蔓難録」・「忘飢草」も見られるものの、蔵書形成過程・医書受容の様相・医療行為そのものとの関係については一切不明と言わざるを得ない（薬箪笥は泉田家に現存。また薬種の送り状が一点のみ遺されている）。

以上を踏まえて、泉田家文書における医学書と泉田家を事例とした在村医の特質をまとめると、実践ではなく医学書による最新知識の集積のみ（あるいは書物の所有のみ）が想定され、在村医研究で提示されている「医道読書」（実際の読書行為に関わらず）による医師身分の継承、及び新医療行為の学知を提示することで既存の排他的社会集団との差異化を展開しようとしたのではなかろうか。このように考えた場合、当時の相馬藩における医師集団の位相、すなわち、「御典医」・仙台藩医で相馬藩医学館に招聘された千葉明渓・地域に存在する「御番医格」・眼科と痘瘡治療などの新しい医療行為従事者といった人びとの、それぞれの動向や利害関係が検討として重要であろう。今後の課題にしたい。

本稿は、在村医研究・相馬藩地方知行研究などの既存の研究の中で、泉田家文書がどのように活用できるかを提示するものである。歴史資料のレスキュー活動の中で新発見された史料を、保全を踏まえた上で、どのように研究蓄積の俎上に載せ、今後生かしていくかの試みであり、茨城史料ネットに協力して得られた新たな保全活動の方向性のひとつである。同様の事例として、『国文研ニューズ』の拙稿を参照頂きたい（「近代茨城のジャーナリスト・長久保紅堂の「発見」 －連携研究「大震災後における文書資料の保全と活用に関する研究」と茨城史料ネット－」、『国文研ニューズ』41、2015年）。

付記：本研究は平成27年度人間文化研究機構問題解決志向型基幹研究プロジェクト形成に係る準備調査経費『人命環境アーカイブズ研究のための基礎的調査研究』（研究代表者　渡辺浩一教授）の研究成果の一部である。

『毘沙門堂本古今集注』の書誌的問題

落合　博志（国文学研究資料館教授）

平成26年度から三年間の計画で、山本登朗関西大学教授を研究代表者とする共同研究「中世古今和歌集注釈書の総合的研究―「毘沙門堂本古今集注」を中心に―」が行われている。平成23年度に中世の古今集注釈書として夙に名高い『毘沙門堂本古今集注』が当館の所蔵となったことを機に企画されたもので、稿者も末席に連なっており、平成27年10月21日開催の国文研フォーラムにおいて、その一端を紹介する意味で、『毘沙門堂本古今集注』の書誌的問題を中心とする発表を行った。以下はその概要であるが、考えるべき点を多く残しており、現時点における中間報告であることをお断りしておく。なお以下、当該写本を「毘沙門堂本」と呼ぶ。

1．近代における毘沙門堂本の“発見”と伝来

東京大学史料編纂所のマイクロフィルムに収められた毘沙門堂所蔵の書類綴じ（年紀は明治40年頃～大正6年に亙る）の中に、明治44年12月12日付の、東京帝国大学史料編纂掛より毘沙門堂宛の借用資料返進状があり、添付された目録の「明治四十年一月十日借入ノ分」（計22点）の中に「一古今注　計六巻」とあるのが毘沙門堂本にほかならないと思われる。なお明治40年3月12日付東京帝国大学史料編纂掛より毘沙門堂宛の、国宝調査のため内務省へ貸出中の資料の転借依頼状があり、1月10日は内務省が借り入れた日付であろうか。史料編纂掛の借用中に、東京帝国大学文科大学国語研究室助手であった橋本進吉氏が調査し、解説と略写を作成している。内務省では明治30年の古社寺保存法制定を承けて全国規模で社寺の宝物調査を行っており、毘沙門堂本もその過程で“発見”されたことになろう。

昭和4年6月には京都帝国大学国史研究室が影写本を作成し（奥書「山科毘沙門堂所蔵／昭和四年六月影写」）、また昭和10年2月刊行の未刊国文古註釈大系『古今集註　古今秘註抄』に翻刻が収録され、その開題（無署名であるが吉澤義則氏と見られる）には「古今集註は京都市東山区山科毘沙門堂門跡に襲蔵せられてゐる」とある。

それ以後のある時期に寺外に出て、やがて（恐らく戦後に）小汀利得氏の所蔵となり、その後松田武夫氏、片桐洋一氏を経て、上記のごとく平成23年度に当館に収蔵された。片桐氏所蔵時の平成10年10月に、片桐氏の解題等を付した影印本が八木書店から刊行されたことは、資料公開の意味で画期的であり、研究者を大いに裨益するものであった。なお現在は、当館のwebサイトからカラー画像が公開されている（電子資料館の「所蔵和古書・マイクロ／デジタル目録データベース」から「古今集註」の書名で検索）。

2．毘沙門堂本の書誌（特に書写年代）に関する従来の言及

毘沙門堂本の書誌について最初に公的に取り上げたのは、西下経一氏「古今集伝本の系統論」（『国語と国文学』昭和4年1月）らしい（舟見一哉氏の御教示による）。西下氏は毘沙門堂を訪れたものの、京都帝国大学国史研究室に貸出中で見ることができなかったため、橋本進吉氏の解説を引用して、「書写年代は徳川の始めか、足利の末かにて、原著者の自筆でないことはいろゝの点から考へられる。全部が片仮名と漢字とで書かれ、片仮名には古体を用ゐてゐるところもある」と記されている。

次いで、未刊国文古註釈大系第四冊『古今集註　古今秘註抄』（昭和10年2月）の開題で、「本書の著者に就いては未詳であるが、（中略）何れ鎌倉末期の制作と思はれる。毘沙門堂本は原著者の筆蹟ではなからうが、少くとも余り遠からざる時代に写されたものであらう」と言及されている。

ところで未刊国文古註釈大系の翻刻は、開題には明記されていないものの、直接毘沙門堂本に拠ったのではなく、京都帝国大学国史研究室の影写本を底本に用いたことがほぼ確実である。その理由としては、影写本には原本である毘沙門堂本の紙の継目を……線で示した所が全6軸合わせて147箇所の継目の内5箇所にあるが（内1箇所は二重の……線）、翻刻でもその5箇所にのみ……線が見られる（二重の……線の箇所も一致）ことである。これだけでも十分であろうが、第五・六軸において、毘沙門堂本の題簽ではそれぞれ 古今注自十四至十七 古今注自十八至廿 と所収の巻次を小字一行書きとするのに対し、影写本と翻刻は 古今注自十四至十七 古今注自十八至廿 （翻刻は「注」を「註」とする）のように巻次が二行割書になっている点が共通することも付け加えておく。翻刻が影写本に依拠している事実は、未刊国文古註釈大系の開題が実際に毘沙門堂本を見て書かれたものかどうかに疑いを抱かせるものである。毘沙門堂本が転写本であることは毘沙門堂本を見れば自明であるにもかかわらず、「毘沙門堂本は原著者の筆蹟ではなからうが」という曖昧な言い方をされたのは、あるいは直接毘沙門堂本を見ていなかったためではなかろうか。

さて上述した影印本『毘沙門堂本 古今集注』（平成10年10月）の解題では、「書写年代については、（中略）鎌倉時代ごく末期、おそらくは南北朝期の書写と見て誤りあるまい」とある。これは「鎌倉時代ごく末期」と「南北朝期」のどちらを主に指しているのか分かりにくいが、同書の凡例に毘沙門堂本について「鎌倉時代末期～南北朝期書写の古今和歌集の注釈書」と記載があるので、それと同じ意味と解される。

3．毘沙門堂本の書誌的性格

毘沙門堂本が既存の本の転写本であることは、「本押紙」「押紙云」という親本で押紙に書かれていたことを示す注記や、親本の文字が見えなかったことを示す「不見」、親本で朱筆で書かれていたことを示す「朱」の注記、また第二・六軸冒頭部の虫損箇所、第五軸冒頭部の破損箇所の表示などから明らかである。従って、毘沙門堂本について考える際は、親本の存在を念頭に置く必要がある。そして親本が書写されてから毘沙門堂本が書写されるまでには、親本に比較的大きな虫損が生ずる程度の年代の開きがあることも、第六軸の虫損の様相から推察される。

また毘沙門堂本が影写ではないこと、即ち見取り写しによる転写本であることは、誤写の様相などから確実である（図版Ⅰ・Ⅱ参照）。筆線に、影写本にありがちな渋滞が見られないこともそれを支持する。

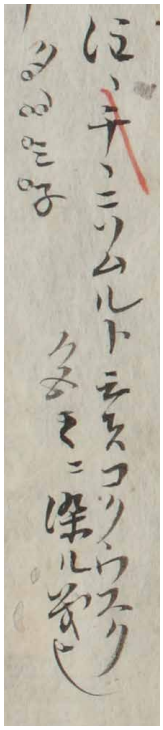
なお、毘沙門堂本は親本の行取りを変えずに写しているらしい、即ち各行頭・行末の字が親本と一致するように写しているらしいことが、行末の字配りのあり方から推測される。ただしその説明には多くの図版を要するため、紙幅の都合上具体的には別の機会に譲りたい。

その他、料紙は通常の楮紙の部類であるが、漉きむらなどもあり良質とは言い難いこと、過去の補修時に一旦継ぎ目を全て離して継ぎ直しているらしく、その際料紙の上下を少し截断していると見られることなども指摘できるが、詳しい言及は省略する。

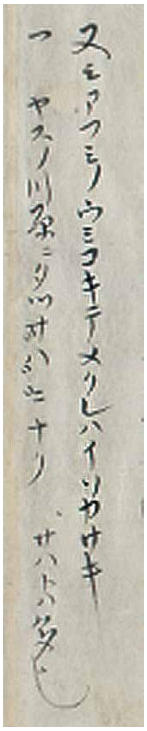
書写年代については上述のように、室町末期～江戸初期と見る説と鎌倉末期～南北朝期と見る説があるが、稿者は紙質・墨色などから、前の説に近い線で考えている。そのことを客観的に示す徴証を探索中であるが、返り点のレ点の位置と形状が一つの根拠になるかと予測している。

4．毘沙門堂本の書写された状況

毘沙門堂本が書写の当初から毘沙門堂にあったのか、後に他所から移されたのかは不明である。仮に書写年代を室町末期～江戸初期とし、当初から毘沙門堂にあったとすれば、中院通為男（通勝弟）で天正4年（1576）以前に毘沙門堂門跡となり、慶長3年（1598）頃に還俗して門跡を退いた公厳（還俗後に玄菴三級と名乗る）、あるいは慶長16年（1611）に後陽成天皇から門主不在であった毘沙門堂を預かり、寛永4年（1627）に弟子の公海が毘沙門堂門跡となるまで管領した天海との関わりが注意される。その際、曼殊院に類似の注釈書を含む古今集関係資料が多く蔵されることを考慮すると、親本が曼殊院にあった可能性も想像されようか。ただし公厳の出身の中院家にも古今集の古注類が伝わっており、中院家との関係も想定すべきかも知れない。いずれにしても、毘沙門堂本の書写状況、また親本の所在等については今後検討が必要であり、更に進んで親本の書写年代や当該系統の注釈の成立した年代と場所なども問題となるが、それらについては書誌的考察とともに記述内容の分析を通して追究されて行くことになろう。



図版Ⅰ：第三軸　秋下二五七番歌の注
（初め「色二」と書き、「二」の上から「く」を重ね書きして「色くニ」とする）



図版Ⅱ：第三軸　末尾部分の『万葉集』の引用
（「ヤ」の第一画を書いてから位置の誤りに気付き、改めて正しい位置から書き直す）

シーボルト本『北斎写真画譜』の行方

鈴木　淳（国文学研究資料館名誉教授）

欧州で『北斎漫画』と並んで早くから注目された北斎の絵本に『北斎写真画譜』一帖がある。本絵本は、人物、草花、動物を描いた色摺り十五枚から成る画帖で、対象の質感を見事に再現した北斎の下絵と、板刻と摺刷の卓越した職人技とが相俟った、グラフィック・アートにおける傑作というべきものである。板の種類としては、文化十一年（1814）序の私家板の初摺り本と、文政二年（1819）、江戸・鶴屋喜右衛門求板の再摺り本の二種があり、板木自体は同一と見られる。拭きぼかしなど、高度な摺りの技術を要したため、摺刷部数はいずれもごく限られたものであったが、早くから海外の識者の眼に止まったこともあり、欧米の所蔵機関には折々散見される。

そのうち、もっとも早い蒐集にかかると思われるのが、オランダのライデン国立民族学博物館蔵のフォン・シーボルト書籍コレクションに見られる一点である。今回、人間文化研究機構の共同研究「オランダ国ライデン伝来のブロンホフ、フィッセル、シーボルト蒐集日本書籍の調査研究」で調査したところによると、文政二年の鶴喜板（1‐4448）が伝存し、さらに当該本には、シーボルトの蒐集印「VERZAMELING VON SIEBOLD」の他に、コック・ブロンホフが蒐集した本であることを示すスタンプ「Uit de Verzam Cock Blomhoff」を押捺することが確認できる（1）。よって、これは厳密にいうと、シーボルト自身が蒐集した本ではなく、シーボルトとほぼ同時期に来日したオランダ商館長ブロンホフが蒐集した本であったことが判明する。

ところが一方で、シーボルトも『北斎写真画譜』を蒐集していた事実が知られている。すなわちシーボルトによって弘化二年（1845）に刊行された、『フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト蒐集並ニハーグ王立博物館所蔵日本書籍及手稿目録』にも本絵本が収録されるからである。ただし、ホフマンのラテン語解説には単に「Jedo 1813」（2）とだけあることから、一八一三年は一八一四年の誤認で、文化十一年序刊の私家版の方と推定できる。私家板の刊行時期は、序文の文化十一年三月頃に想定されるため、鶴喜板が出たのは、その約五年後ということになるが、シーボルトが蒐集したのは、江戸参府の文政九年（1826）の春である可能性が大きい。いずれにしても、シーボルトは、書肆板がすでに出回っていた時期に、ことさら私家版を手に入れたことになるので、いささか特異なケースといいうる。

シーボルトがこの『北斎写真画譜』をどのように入手したのか、正確には不明であるが、美術的なものに関心のあったブロンホフと異なり、シーボルト自身が、この種の本を進んで探求したとは考えにくい。とすれば、シーボルトとの接触のため参集した江戸在住者の献本によったと考えるのが穏当であろう。宇田川榕庵が歌麿の『画本虫撰』を献辞付きで献呈している事実から推しても、本草学に関わりの強い誰彼による可能性が強いように思われる。『北斎写真画譜』が序者岸本由豆流の道楽出板ともいわれることなども考慮すれば、歴とした御用学者は外してよかろう。そのうえで、敢えて推測すれば、『茶席挿花集』『武江産物志』など、自著の献呈に積極的であり、シーボルトの肖像画なども描いた、幕府軽輩の本草家岩崎常正（灌園）辺りが有力と思われるが、いかがであろう。

さて、ライデンの北斎絵本に早くから注目していたのは、フランスの東洋美術愛好家のルイ・ゴンスである。その日本関係の最大の業績である一八八三年刊『日本美術』（*L'Art japonais*）全二巻は、最初の「絵画」部と最終の「版画」部の相当部分を北斎に費やしており、その偏頗なまでの北斎への傾倒ぶりが窺える。特に「版画」において、ライデン所在の北斎資料を一〇点ほど紹介した後、欧州における、北斎の板本挿絵に関する重要なコレクションとして、まず最初に、シーボルトによって形成されたライデン・アカデミー図書館のそれを上げる。かつ北斎の本は二十五点を数えるに過ぎないとしながらも、それらが非常に美しいばかりでなく、初摺りで、しかも保存状態にも非の打ち所がないと激賞している（3）。

さらに、ゴンスは、その中でライデン所在の『北斎写真画譜』についてすでに触れており、美しさの特色に加え、製版と印刷の傑作であり、一八一九年、江戸の鶴屋から少部数で出板されたと述べている（4）。この時、ゴンスは、ライデン所在本とフランス国立図書館蔵本について認識していたごとくで、いずれも文政二年再摺り本であるかのような書きぶりである。なお『日本美術』Ⅰ「絵画」では、『北斎写真画譜』から布袋図、塗師図を、同Ⅱ「版画」で鴛鴦図、鷹図をそれぞれモノクロ図版として製版し、挿絵として採択しているが、ゴンスが、どの本を原版に使用したかは不明である。彼が『日本美術』の公刊を機に、パリのジョルジュ・プティ画廊で開催した日本美術の展示会の目録 *Cotalogue de l'Exposition rétrospective de l' 'Art japonais* の中の、北斎の板本を三〇点ほど出陳したテオドーレ・デュレのリストにも『北斎写真画譜』の名は見えない（5）。

その後ゴンスは、自ら所蔵する本とシーボルト本の重複分を物々交換をするために、一八八五年、ライデン国立民族誌学博物館に赴く。そのことについて、シーボルトの没後、そのコレクションを管理していた同館長のリンドル・セルリエは、一八九六年、ライデン大学図書館所蔵分を含む日本書籍目録 *Bibliothèque Japonaise: Catalogue raisonnè des livres et des manuscrits japonais* を出版し、序文で、一八八五年、ライデン民族誌学博物館は、シーボルト本重複分との交換によって、日本のデッサンのアルバムをゴンスから受け取ったことに言及している（6）。セルリエは書名を明記していないが、この時にゴンスが得た本の眼目が『北斎写真画譜』であったであろうことは、一九二四年五月、オテル・ドロワットでのゴンスの版画、絵本類の売立て目録 *Œuvres d'art du Japon: Choix d'estampes et livres* の一九五番に、書肆名と出板年を欠き、冒頭にシーボルト蒐集印のある『北斎写真画譜』が挙げられることから確実視される（7）。

つまり、ゴンスは、ライデンにあった『北斎写真画譜』の二点のうち、シーボルト自身が蒐集した文化十一年序の初摺り本を入手したのであり、結果、ライデンにはブロンホフ蒐集の文政二年の再摺り本が残されたのであった。なお、クリストフ・マルケの「19 世紀後半のフランスにおける日本美術史学の黎明期－ "L'Art japonais" 及び『浮世絵類考』と "Histoire de l'art du Japon" －」（8）には、そのときゴンスが得たシーボルト本には、他に『京城画苑』『花鳥画帖』があることを明らかにしている。逆にライデンが得た本は、私どもの調査では『北斎漫画』第四編の一点しか確認できていない。

注（1）人間文化研究機構 国文学研究資料館編『シーボルト日本書籍コレクション 現存書目録と研究』、勉誠出版、二〇一四年一二月、二一〇頁。

（2）中野三敏監修、高杉志緒・宮崎克則編『シーボルト蒐集和書目録』、八木書店、二〇一五年三月、七七頁。

（3）Louis Gonse, *L'Art japonais*, Paris: A. Quantin, 1883, p.355.

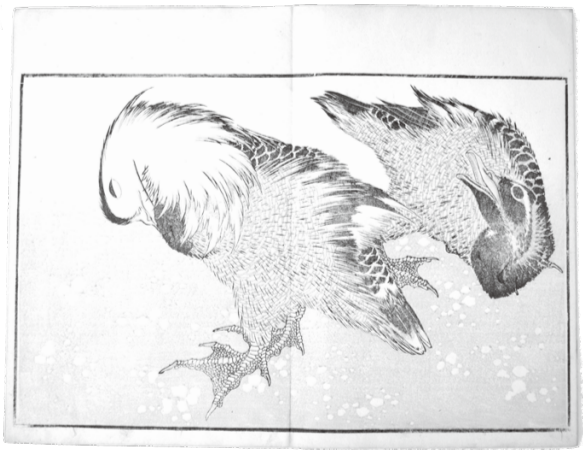
（4）*ibid.*, p.357.

（5）Louis Gonse, *Cotalogue de l'Exposition rétrospective de l' 'art japonais*, Paris, A.Quantin, 1883, 495 p.

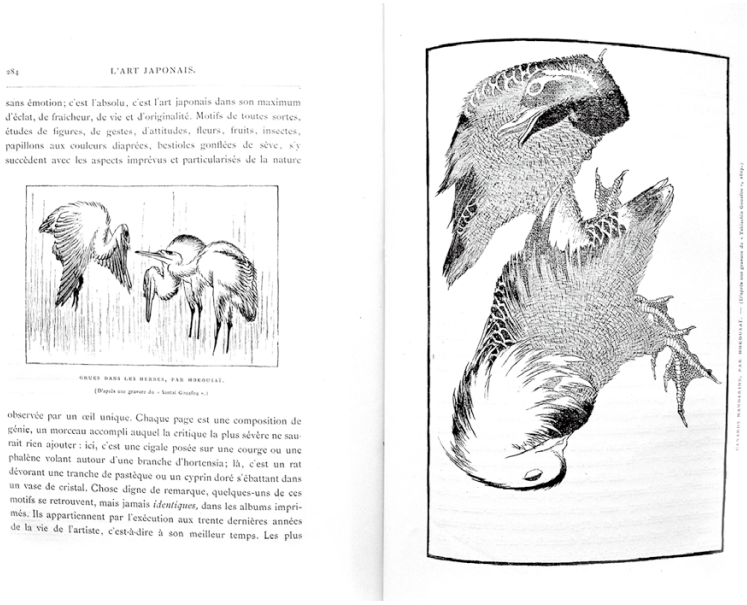
（6）Lindor Serrurier, *Bibliothèque Japonaise: Catalogue raisonnè des livres et des manuscrits japonais*, Leyde: Brill, 1896, préface p.Ⅵ.

（7）*Collection Louis Gonse, Œuvres d'Art du Japon: Choix d'estampes et livres,* Paris: Hotel Drouot, 1924, p.55. 馬淵明子編『フランス人コレクターの日本美術品売立目録』（エディション・シナプス、二〇一一年）収録。

（8）『比較日本学研究センター研究年報』第４号、二〇〇八年。



米国フリーア美術館図書館蔵、『北斎写真画譜』鴛鴦図



284 L'ART JAPONAIS.

sans émotion; c'est l'absolu, c'est l'art japonais dans son maximum d'éclat, de fraîcheur, de vie et d'originalité. Motifs de toutes sortes, études de figures, de gestes, d'attitudes, fleurs, fruits, insectes, papillons aux couleurs diaprées, bestioles gonflées de sève, s'y succèdent avec les aspects imprévus et particularisés de la nature

GRUES DANS LES HERBES, PAR HOKOUSAÏ.

(D'après une gravure de « Sotai Gwafou ».)

observée par un œil unique. Chaque page est une composition de génie, un morceau accompli auquel la critique la plus sévère ne saurait rien ajouter : ici, c'est une cigale posée sur une courge ou une phalène volant autour d'une branche d'hortensia; là, c'est un rat dévorant une tranche de pastèque ou un cyprin doré s'ébattant dans un vase de cristal. Chose digne de remarque, quelques-uns de ces motifs se retrouvent, mais jamais *identiques*, dans les albums imprimés. Ils appartiennent par l'exécution aux trente dernières années de la vie de l'artiste, c'est-à-dire à son meilleur temps. Les plus

フランス、ギメ美術館蔵『日本美術』（*L'Art japonais*）鴛鴦図

マレガ・プロジェクト　シンポジウム in バチカン「キリシタンの跡をたどる」

2015年9月12日（土）、サンピエトロ大聖堂からほど近い場所に位置する聖ピオ十世ホール（Sala San Pio X）において、マレガ・プロジェクト主催シンポジウム「キリシタンの跡をたどる－バチカン図書館所蔵マレガ収集文書の発見と国際交流－」（Tracing Christianity in Early Modern Japan: The Marega Collection in the Vatican Library and its Value for International Co-operation）が開催されました。

マレガ・プロジェクトとは、2011年、ローマ教皇庁バチカン図書館において発見された、1万点を超える膨大なキリシタン禁制に関わる史料群の調査・研究のために発足したプロジェクトです。プロジェクトの名前は、この史料群を戦前の日本で収集・研究し、バチカンにもたらした、サレジオ会宣教師のマリオ・マレガ神父によります。2013年に発足したマレガ・プロジェクトは、年2回程度の実地での史料整理・調査を中心に活動するとともに、2014年11月には、史料群の舞台となる臼杵市でシンポジウムを開催しました。今回のシンポジウムは、史料群のもう一つの舞台となるバチカンで、成果をはじめて共有する機会となりました。

シンポジウムでは、開会に先立ってジャン＝ルイ・ブルーゲス氏（バチカン大司教（尚書長））、チェーザレ・パシーニ氏（バチカン図書館長（代読））、立本成文氏（人間文化研究機構長）、長崎輝章氏（駐バチカン大使）、工藤利明氏（大分県教育委員会教育長（代読））にご挨拶いただき、開会にあたり、ローマ教皇フランシスコのメッセージが読み上げられました。

シンポジウムの狙いは、大友一雄氏（国文学研究資料館・プロジェクト代表）の趣旨説明により、「異なる文化・宗教との接触・受容はもちろん、排除や弾圧なども含めてひとつの「交流」として捉え」「キリスト教が取り結んだ様々な歴史を通じて、文化や未来を論じることを考え」ることにあると説明されました。

基調報告の大橋幸泰氏（早稲田大学）「16－19世紀におけるキリシタンの受容・禁制・潜伏」は、日本近世のキリシタン禁制の時代にも信仰を続けた人々が存在したことに着目し、日本におけるキリスト教の受容と共生の構造を明らかにしました。

第Ⅰ報告の佐藤晃洋氏（大分県立先哲史料館）「近世日本豊後のキリシタン禁制と民衆統制」は、マレガ史料の中心となる臼杵藩宗門方の史料の分析から、17世紀にキリシタン禁制システムが成立する過程を明らかにしました。

第Ⅱ報告のシルヴィオ・ヴィータ氏（京都外国語大学）「一宣教師の半生を探る－マレガ文書群の成立とその背景にあるもの－」は、プロジェクトの発端となったサレジオ会宣教師マレガ神父の経歴・活動を、新たな史料の分析をもとに明らかにしました。

第Ⅲ報告のアンヘラ・ヌーニェス＝ガイタン氏（バチカン図書館）「マレガ神父収集文書の整理と保存－バチカン図書館と日本の共同調査と交流－」は、バチカン図書館修復保存（restauro）部門責任者のアンヘラ氏により、資料保存の観点から、現代の日欧の技術・人材交流（＝コラボレーション）の成果をお話しいただきました。

パネルディスカッションは、マルコ・デル・ベネ氏（ローマ大学）・湯上良氏（当時中京大学）をコーディネーターに進められ、資料保存の観点から井口和起氏（元京都府立大学学長）、キリシタン史の観点から川村信三氏（上智大学）がそれぞれ報告へのコメントを行い、フロアも交えて活発に議論が為されました。

5時間にも及ぶシンポジウムは、今西祐一郎氏（国文学研究資料館長）・ラファエッレ・ファリーナ枢機卿の挨拶をもって閉会となりました。

当日は約130人もの参加者があり、日本語・英語・イタリア語を交えて行われる報告やディスカッションに熱心に聞き入っている様子が見られ、マレガ・プロジェクトに国境を越えて高い関心が寄せられていることがわかりました。なお、シンポジウムの報告は、国文学研究資料館紀要（アーカイブズ研究篇）第12号（2016年3月刊行）に掲載される予定です。

（三野　行徳）

特別展示「韓国古版画博物館名品展」と国際ワークショップ「東アジアの絵入刊本」

今回の名品展の展示品は、古版画博物館の韓禪學館長によって選ばれたものでしたが、韓国の古版画だけでなく、中国をはじめとしたアジア諸国の古版画も含んでおり、アジアにおける版画の歴史を概観できるようなラインナップとなりました。アジアの版画の歴史においては、仏教版画がその主軸であったことが、よくわかるような展示であったのではないでしょうか。

8世紀、中国に始まった版画は、すべて仏教に関するものでした。中国で仏教以外の版画が現れるのは12世紀、韓国では15世紀、日本にいたっては17世紀を待たねばなりませんでした。日本人は、版画というとすぐに浮世絵を思い浮かべるのですが、それらは版画の歴史においては極々新しいものなのです。

『梵文陀羅尼経咒』（図1）は、9世紀（晩唐）のものと推定される最初期の仏教版画です。これにはじまり、中国から朝鮮への影響を示すもの、また朝鮮独自の図様を持つものなど多様な仏教版画が展示されました。仏教以外の展開では、なんといっても『三綱行実図』（図2）でしょう。1434年に世宗によって刊行されたものです。その後多くの版を重ねるとともに、『二倫行実図』『続三綱行実図』『東国新続三綱行実図』『五倫行実図』と、朝鮮時代末期にいたるまで後続の作品が刊行され続けました。日本にも渡っており、江戸時代前期には『三綱行実図』の和刻本と和訳本とが刊行されています。

図１　『梵文陀羅尼経咒』

図２　『三綱行実図』

中国や日本で大いに発展した小説や戯曲の絵入刊本は、韓国にはほとんどありません。これも大変興味深い点でしょう。それぞれの国の社会背景が関わっていると思われます。

特別展示の期間中、10月17日には国際ワークショップが開催され、韓国を中心に、中国やベトナムの古版画についての研究発表が行われました（写真）。プログラムを掲出します。それにあわせて、韓国から鄭燦民さん（彫り）と權赫松さん（摺り）のお二人、日本の竹中健司さん（色刷り、竹中木版竹笹堂）をお招きし、実演をしていただきました。当日は、立川市のスタンプラリーとも重なり、多くの方に見ていただくことが出来ました。

（入口　敦志）

国際ワークショップ：東アジアの絵入り刊本

日時：平成２７年１０月１７日（土）　**会場：**国文学研究資料館

1．東アジア古版画蒐集と交流
　韓禪學（明珠寺古版画博物館館長）
2．韓国仏教版画の特徴とその流れ
　朴桃花（文化財庁文化財鑑定委員）
3．韓国明珠寺古版画博物館蔵《梵文陀羅尼経咒》について
　―経咒の構成形式と版画の様式的特徴による分析と版画史上の位置付け―
　小林宏光（上智大学名誉教授）
4．韓国世俗版画の成立と展開
　金永昊（東北学院大学准教授）
5．全相平話五種（国立公文書館蔵）の刊年を疑う
　入口敦志（国文学研究資料館准教授）
6．ベトナムの阮王朝に印刷した『如来応現図』についての考察
　グエン・ティ・オアイン（ベトナム社会科学翰林院漢喃研究所准教授）

ワークショップ、韓禪學館長の発表

※展示、ワークショップとも、JSPS 科研費23320058「東アジア（日・中・韓）の絵入り刊本成立と展開に関する総合研究」（研究代表者：入口敦志）による研究成果の一部です。

平成２７年度　国文学研究資料館「古典の日」講演会

平成２７年１１月１日（日）に東京都千代田区のベルサール神田において国文学研究資料館「古典の日」講演会が行われました。１１月１日「古典の日」は、我が国の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、最も古い日時が寛弘五（1008）年１１月１日であることからこの日に定められました。

国文学研究資料館でこの「古典の日」に講演会を催すのは今年で４回目となります。例年の応募者多数の状況に応えて、今年も会場は都心のイベントホールで行いました。当日は、古典に関心を持つ３４２名の参加が有り、今西祐一郎国文学研究資料館館長の挨拶の後、お二人の講師からお話をいただきました。まず、当館教授の齋藤真麻理氏が「春琴の恋―御伽草子の世界から―」という題でお話されました。よく知られている谷崎潤一郎の『春琴抄』の中に、御伽草子の内容が様々にちりばめられていることを明快に説き起こしました。「あの春琴抄が……」という意表をつく指摘ながら、その的確さ故、一同納得の面持ちでした。次いで、東京大学教授のロバート キャンベル先生が「日本文学のアーリー・モダン」という題でお話をされました。明治初期に義務教育とともに国政の懸案であった一般国民への教導がどのように行われたかという堅いお話を、まるで掌を指すかのようにわかりやすくお話され、当時の国民教導の様子に会場はすっかり引き込まれていました。お二人とも、古典としては異色の内容ながら、その中身の濃さ故に、終了後のアンケートには、多くの好評の声が寄せられました。なお、この「古典の日」講演会は、来年度からは、１１月１日前後の休日に行われることになり、平成２８年度は、１１月３日（木・祝日）に開催の予定です。

（田中　大士）

会場の様子

齋藤　真麻理　氏

ロバート キャンベル　氏

第 39 回国際日本文学研究集会

平成27年11月14日（土）～15日（日）、第39回国際日本文学研究集会が国文学研究資料館において開催されました。二日間に渡る研究集会において、国内外の応募より選出された9名の研究発表、3名のショートセッション発表、6名のポスターセッション発表の、計18名による発表がなされました。また、二日目の午後には、「日本文学の越境―非・日本語で Haiku を読む／詠む―」と題するシンポジウムが行われ、深沢眞二（和光大学教授）の司会で、木村聡雄（日本大学教授）、フェスラー・マイケル（FESSLER Michael、日本エズラ・パウンド協会役員）、ガーガ・リー（GURGA Lee、アメリカ俳句協会元会長）、鳥羽田重直（和洋女子大学教授）の四人のパネラーは俳句の外国語への翻訳や英語、中国語といった日本語以外の言葉による「Haiku」創作について紹介頂きました。

国際日本文学研究集会は、国文学研究資料館の主催によるもので、日本文学研究の国際的な発展を目的とし、昭和52年から毎年秋に開催されている長い歴史を有するイベントです。今回は天候が悪いなか、海外及び国内に在住の12ヶ国の外国人研究者計21人を含め、計93名の参加者が集まりました。発表者はさまざまな角度から研究成果を発表し、質疑応答も活発に行われ、出席者に多くの刺激を与えました。

第39回国際日本文学研究集会の会議プログラム及び要旨集（日本語・英語）の PDF 版は、国文学研究資料館の web にて公開されておりますので、御覧いただければ幸いです（http://www.nijl.ac.jp/pages/event/symposium/2015/japanese_literature.html）。また、研究発表の全文及びショートセッション発表の要旨、ポスターセッションのテーマを収録した会議録は来年3月に国文学研究資料館より出版される予定です。

なお、第40回国際日本文学研究集会は平成28年11月19日（土）～20日（日）に開催される予定です。40周年にあたる記念すべき来年の集会には、若手の研究者や外国人研究者がより参加しやすくするために、今年と同様、研究発表・ショートセッション発表およびポスターセッション発表の三つのセッションにおいてはテーマを設定しないのみではなく、すべてのセッションに英語による発表が可能としました。国内外の若手研究者の多数のご参加をお待ちしております。平成28年4月下旬から研究発表を募集しますので、詳しいことは来年４月に当館のホームページを御覧いただくよう、お願い申し上げます。

（陳　　捷）

シンポジウム

研究発表

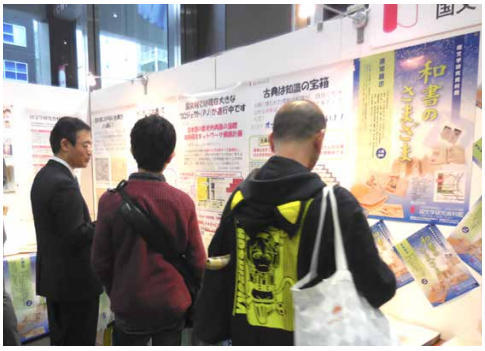
ショートセッション

ポスターセッション

大学共同利用機関シンポジウム 2015
「研究者に会いに行こう！　―大学共同利用機関博覧会―」参加記

大学共同利用機関シンポジウム２０１５「研究者に会いに行こう！」が、11月29日（日）にアキバ・スクエア（秋葉原 UDX 2F）で開催されました。本年で６度目となる大学共同利用機関主催の大型イベントで、日本を代表する２１の研究機関が、最新の研究成果と活動内容をトークとブース展示で紹介するものです。当館からは、「とある人文系の蔵書印データベース ―あなたの本は、誰の本？―」と題した研究者トークを青田が行い、研究部の渡辺浩一教授と管理部スタッフ３名が体験展示ブースにて来場者への説明と交流にあたりました。（当日、飛び入りで広報出版室長と館長も参加！）

秋葉原という場所柄もあってか、昨年の2倍近い674名にのぼる幅広い年齢層の来場者があり、当館ブースも始終訪問者で賑わいました。展示に供した江戸の和本を興味深く手に取った高校生からは、「当時どれくらいの値段で買えたのか」「識字層はどの程度あったのか」「印刷の手間はどれほどかかるものか」といった具体的な質問が出たほか、歴史的典籍に関する大型プロジェクトの成果報告や古典籍のくずし字読解、画像データベースに強い興味を示し、じっくりと展示を眺めて説明に耳を傾ける方が大勢いらっしゃいました。大学共同利用機関ならではの、膨大な学術資料の蓄積とデータベースの構築といった知的基盤の整備と、大学や地域社会と連携した共同研究の一端をご紹介するよい機会となりました。



（青田　寿美）

ようこそ国文研へ

このところ毎夏、事務スタッフと協働して、高校生もしくは大学生のアテンドを務めています。閲覧室の案内は、情報サービス係の武部真子（しんこ）係長がいつも的確に、しかもユーモアを交えて行ってくれますので、私は、展示室でのギャラリートークと和本のレクチャーを主に担当。高校生と大学生ではメニューを少し違えますし、院生がメインの場合はいきおい和本の書誌学的な解説に傾斜したガイダンスをしますが、ともあれ若い彼らに、ふだんとは異なる〈場の雰囲気とモノの感触〉を身体ごと伝えたいと執着しています。

「役に立つかどうか」「すぐに成果が出るかどうか」など、科学をめぐる昨今の短絡的な「ものさし」のありように多くの研究者が危機感を強めています。すぐに役に立つものはすぐに役に立たなくなりますし、多くの失敗こそがたった一つの成功を生む源になるわけですから、やはりわたくしどもとしては、じっくりと腰を据えて人と向き合い、モノに即して学びを深めてほしい。ものが溢れ、何でも検索すればそれなりの回答がいとも簡単に見つかってしまう現代だからこそ、〈知と人間学〉の宝庫である「古典」に接することで、「幸せとは何か」「豊かさとは何か」を愚直に考えてほしいと切に思うのです。

折しも、わたくしの所属する日本近世文学会では、２０１５年度から新たに、小中高生を主対象として、学会としての「出前授業」を開始しました。【参照】「和本リテラシーニューズ」第1号（２０１５年７月刊）＊学会ＨＰからダウンロードできます。若い彼らに和本の面白さやくずし字の楽しさを知ってもらい、文学のみにとどまらない古典の奥行きをじかに感じる機会にしてほしいと願っています。まことにささやかな取り組みですが、現場の先生方と連携して、これから少しずつ実績を重ねてゆきたいと思います。

閑話休題。今夏（２０１５年）は、例年よりもいくらか多い１７団体の生徒・学生を国文研に迎えました。そのうち私がアテンドしたのは次の６校です。

閲覧室案内（中央は武部係長）

和本レクチャーのひとこま

○中央大学杉並高校
（引率は国語科の菊地明範先生）
７月２８日（火）生徒５名
○市川高校
（引率は理科の坂本・冨永両先生）
８月５日（水）生徒８名
○富山高校
（引率は探究科学科の高尾直和先生）
８月５日（水）生徒６名
○慶應義塾大学文学部小川ゼミ
（引率は小川剛生先生）
７月１０日（金）学部生８名
○立正大学文学部渡邉ゼミ
（引率は渡邉裕美子先生）
７月２９日（水）学部生・院生、計２１名
○日本女子大学大学院生
８月４日（火）院生６名

高校生の場合、今夏は統計数理研究所ならびに極地研究所と連携して、スーパーコンピュータの見学や南極北極科学館にも案内しました。スパコンを間近で見たり、南極の氷をさわったりしたことは、彼らにとって実に新鮮だったようです。せっかく同居しているのですから、三館連携のこうした試みはもっと推進されるべきだと愚考しています。

（神作（かんさく）　研一）

◆【御案内】大学支援「国文研でゼミを」

２０１５年１０月より、大学支援「国文研でゼミを」を開始しました。

どうぞ奮ってご利用下さい。詳細は国文研ＨＰ（http://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/univ/shien.html）を御覧下さい。お申し込みや問い合わせは総務課企画広報係【kikakukoho@nijl.ac.jp】まで。

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

■平成２７年度入試説明会

今年度の入試説明会を10月24日（土）に開催しました。当日は７名の参加があり、参加者のみなさんは、施設見学や希望する教員との個別相談等のプログラムを通じ、入学にあたっての疑問点などを詳細に確認することができたようです。

入試説明会

特別講義

また、同日に開催した今西教授（当館館長）による特別講義「骸骨の東西－『一休骸骨』と『死の舞踏』－」にも入試説明会の参加者を含め30名の参加があり、多数の質問が出されるなど、参加者の関心の高さがうかがえました。

■学術交流フォーラム2015を当館で開催

口頭発表の様子

文化科学研究科主催の学術交流フォーラムが11月21日（土）～22日（日）の2日間にわたり当館で開催されました。当日は71名の参加があり、口頭発表やポスター発表を通じ学生や教員の日頃の研究の成果が公開されました。

口頭発表では活発な議論が交わされ、また、２日目のギャラリートーク及び講演会には一般の方の参加もあるなど、大好評のうちに終了しました。

日本文学研究専攻からの発表者は次のとおりです。

＜口頭発表＞

武居雅子（院　生）：『香名引歌之書』－和歌が語る香り－

粂　汐里（院　生）：仏教説話を題材とした説経・古浄瑠璃の諸相－『阿弥陀胸割』を中心に

＜ポスター発表＞

黄　　昱（院　生）：『徒然草』地名新考

張　培華（修了生）：外国語訳『枕草子』問題－「春はあけぼの」章段を中心に－

伊藤鉄也（教　員）：指で読めた鎌倉期の写本『源氏物語』－視覚障害者と文化を共有する－

相田　満（教　員）：ＧＩＳ利用により現出される歴史地名・地名の連関性と分布例

■中間報告論文研究発表会を開催

毎年度開催している中間報告論文研究発表会を12月3日（木）に開催しました。今年度は、在学生２人に加え、研究生も発表を行いました。

吉田 紀惠子 氏

森下 涼子 氏

王 雯璐 氏

閲覧室カレンダー　2015年２月～2016年４月

■青は休館日　■黄色は土曜開館日

2016年2月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29					

2016年3月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

2016年4月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

●開館：9：30～18：00　●請求受付：9：30～12：00,13：00～17：00　●複写受付：9：30～16：00

ただし、土曜開館日は、

●開館：9：30～17：00　●請求受付：9：30～12：00,13：00～16：00　●複写受付：9：30～15：00

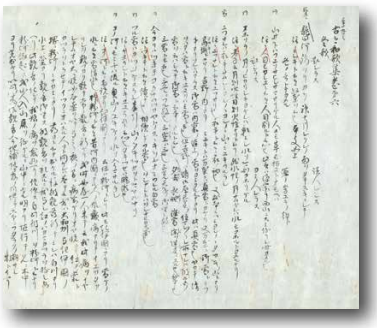
表紙絵資料紹介

毘沙門堂本古今集注（当館蔵　貴重書）

巻子本の写本、６軸。紙高約31cm。本文料紙は楮紙。外題は本文と別筆で、第１軸「古今仮名序注」、第２軸「古今注自一至三」、第４軸「古今注自十一至十三」、第５軸「古今注自十四至十七」、第６軸「古今注自十八至廿」とある（第３軸の外題はほとんど消滅）。奥書・識語は無い。各軸初めに旧蔵者である小汀利得の「をばま」印記がある。

中世古今和歌集注釈書は、説話・謡曲など、周辺分野に多大な影響を与えた。当該資料は、説話的・秘伝的要素を強く持った中世古今集注釈書の代表的存在として知られている。多くの中世古今和歌集注釈書は、部分的にしか伝わらないが、当該資料は『古今和歌集』の序文および全20巻全ての注釈を完備しており、また量的にも豊富な注釈を有する点が貴重である。早く、昭和10年に未刊国文古註釈大系第四冊『古今集註 古今秘註抄』（帝国教育會出版部）に翻刻が収められ、世に知られるようになった。さらに、旧蔵者の片桐洋一氏による解説と、齋藤文氏による声点付和語語彙索引を付して、影印が平成10年に『毘沙門堂本古今集注』（八木書店）として出版されている。

当該資料が、中世古今和歌集注釈書の中でも、注目を集めてきた理由の一つに、書写年代が群を抜いて古いと推定されてきたことがある。先掲の未刊国文古註釈大系の開題で、吉澤義則氏は、「鎌倉末期の制作と思はれる（中略）余り遠からざる時代に写されたものであらう」、片桐洋一氏は『毘沙門堂本古今集注』解題で「鎌倉時代ごく末期、おそらくは南北朝期の書写」と述べている。しかし西下経一氏が橋本進吉氏の説を挙げる形で「書写年代は徳川の始めか、足利の末か」（「古今集伝本の系統論」『国語と国文学』昭和４年１月）と述べているほか、時代が下るとする見解も根強くあり、その書写年代については、慎重に検討する必要がある。



毘沙門堂は、もとは現在の京都市上京区毘沙門町にあったが、中世後半、戦乱などで廃絶し、寛文５年（1665）、京都市山科区の現在地に復興した。当該資料は、昭和10年２月刊の『未刊国文古註釈大系』の開題で、「山科毘沙門堂門跡に襲蔵されている」と記されているが、その後に寺外に出て、小汀利得氏･松田武夫氏･片桐洋一氏の手を経て、当館の所蔵となった。（小山　順子）

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel：050-5533-2910 Fax：042-526-8604

発行日　平成28年（2016）1月22日
編　集　国文学研究資料館広報出版室
印刷所　株式会社 アズディップ
ⓒ人間文化研究機構国文学研究資料館

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。